

活動報告—2007~2008年にかけて

1 東アジア“子ども学”交流プログラム発足

東アジア“子ども学”交流プログラムは、2007年11月に発足し、今年2年目を迎えることとなります。第1回の開幕式と総会は2007年11月に中国で開催され、第2回は2008年4月に日本で開催されました。

■第2回活動報告

(2008年4月19日、20日 お茶の水女子大学)

★子どもの成長・発達と生活環境-子ども学的アプローチ-

小林登 (CRN所長、東京大学名誉教授)、朱家雄 (華東師範大学教授)、秦金亮 (浙江師範大学杭州幼児師範学院院長)、黄紹文 (長沙師範専科学校副教授)、内田伸子 (お茶の水女子大学副学長)、榊原洋一 (お茶の水女子大学教授)、山本登志哉 (早稲田大学教授)、首藤美香子 (お茶の水女子大学研究員)、一見真理子 (国立教育政策研究所総括研究員)、一色伸夫 (甲南女子大学教授) ※名前は登壇順

第2回東アジア“子ども学”交流プログラムは、2008年4月19日、20日の2日間にわたって、チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) とお茶の水女子大学G-COEによる主催、ベネッセ次世代研究所による共催のもとで開催されました。

テーマは「子どもの成長・発達と生活環境-子ども学的アプローチ」。子ども関連の研究者、お茶の水女子大学の学生、子どもに関心を持つ200名余りの方が、足を運んでくださいました。

初日は、小林登CRN所長の挨拶に始まり、基調講演では華東師範大学の朱家雄先生が、最近日本で放映されて話題になったNHKスペシャル「小皇帝の涙」を中国人の立場から考察し、大変関心を集めました。そのほか、浙江師範大学の秦金亮先生は「発達認知神経科学研究の進展が幼児教育にもたらす意義」、長沙師範専科学校の黄紹文先生は「幼稚園教諭養成」についての発表を行い、中国での脳科学と幼児教育の研究および幼稚園教諭養成の現状について紹介しました。

2日目は日本の研究発表が中心となりました。早稲田大学の山本登志哉先生は「日中比較の中で見えてくる『文化としての子どもの発達』」、お茶の水女子大学の首藤美香子先生は「日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ」、国立教育政策研究所の一見真理子先生は「幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ」というテーマで講演を行いました。日中文化・育児観の比較調査や中国の子ども観の歴史的な流れを踏まえながら、中国の幼稚園や小学校の映像とともに、日中子ども交流史にまで及ぶ幅広い研究と興味深い史料が数多く紹介されました。

2日間にわたり日中両国の研究者6名による講演と、それぞれの日の最後には日中の講演者全員によるシンポジウムが

行なわれ、議論がさらに深められました。

どのような国についても、歴史や文化背景を無視して教育を語ることはできませんから、お互いの違いを知り、理解し、尊重しあい、学びあっていくことが大切です。「子ども学」という視点を共有することで、日中の研究者がさらに交流を深め、好ましい関係をつくり上げていくものと期待したいと思います。



「東アジア“子ども学”交流プログラム」概要

趣旨：育児・保育・幼児教育に関係する日中の大学、教授の相互交流講義を支援し、子ども学の普及ならびに国際化を目指す。その結果、子どもを取り巻く諸問題の解決や環境改善に役立つような学術活動を推進する。

主催：チャイルド・リサーチ・ネット、華東師範大学

協賛：(株)ベネッセコーポレーション、
ベネッセ次世代育成研究所

後援：中華人民共和国駐日大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議

事務局：チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)

〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105
神保町三井ビル16F (株)ベネッセコーポレーション内